

# 歴史の授業における新聞活用

兵庫県公立中学校教諭

## 1 はじめに

中学校社会科の三分野のうち地理・公民的分野においては、新聞記事を活用した授業実践は多々報告されている。しかし、それが歴史的分野になるとあまりにも少ない。

そこで、歴史的分野においても新聞を活用していくために「授業実践例」と「新聞活用の効果と課題」を提示したい。

## 2 授業実践例

### (1) 単元名

- 第5部 近代国家の歩みと国際社会
- 第7章 軍国主義と日本の行方
- 3 強まる軍部とおとろえる政党

### (2) 学習課題

日本政府は当初、国際連盟を脱退するつもりはなかったのに、なぜ方針を転換して脱退してしまったのか。

### (3) 授業の流れ

①『社会科 中学生の歴史』(以下、教科書) p.206の「②国際連盟の脱退を報じる新聞」にある、日本に対する勧告はどのような内容か。

→国際連盟は、  
「満州国」を承認しない。  
日本に軍隊の引き上げを勧告。

②この勧告案について、国際連盟の加盟国は、どのように判断したか。

→42か国が賛成し、反対は日本のみであった。

③この結果を受けて日本は国際連盟を脱退したが、最初から脱退するつもりであったのか、なかったのかを予想するにあたり、次の資料を提示する。

1933年2月15日の閣議では、陸軍大臣荒木貞夫大将と外務大臣内田康哉が「ここまでくれば、国際連盟から脱退だ」と主張しはじめます。この時は他の閣僚には「まだまだ」という人もいて、斎藤実首相も「とんでもない」というので、結論は持ち越されました。  
半藤一利『昭和史 1926-1945』p.111  
(平凡社, 2009年)

→日本は、国際連盟を脱退するつもりはなかった。

④日本は、国際連盟を脱退するつもりはなかったのに、なぜ方針を180度転換して脱退したのか。この謎を解明するために、教科書p.207の「チェック&トライ」を活用する。



②国際連盟の脱退を報じる新聞(東京朝日新聞 1933年2月25日)

『社会科 中学生の歴史』 p.206②

☑ 民衆が満州事変を起こした軍部を支持した理由を、本文から探してみましょう。

理由は、「資源の豊かな『満州』を支配し、不景気を解決しようとする考えが広がって」いたからであるが、では、「民衆はどのようにして上記のような考え方を知ったのか、広めたのは何であったのか」、ということが続けて聞きたい。

ここで、いくつかの新聞記事を紹介する。

#### 《満州事変についての報道》

「…わが守備隊がただちにこれを排撃手段に出たことは当然の緊急処置といわねばならない」  
(1931年9月20日：大阪朝日新聞)

#### 《満州国建国に対する国際連盟の対応についての報道》

「連盟に『左様なら！』という日が、近づいたようである」

(1932年12月18日：東京日日新聞)

「連盟を脱退せよ」

(1933年2月14日：讀賣新聞)

ここから、新聞の果たした役割が見えてくる。つまり、軍部が起こした満州事変や国際連盟脱退を、ほとんどの新聞が当然のことと報道すると、民衆もこれを熱狂的に支持した。政府は、この世論に押し切られる形で国際連盟脱退にふみきったのである。

「満州事変」(1931年)から「国際連盟脱退」(1933年)にいたるころは、民衆が軍部に引きずられたのではなく、軍部を支持した新聞を民衆も支持したのである。

⑤最後に、私たちはここから何を学ばなければならないのかを問う。歴史学習における

ポイントの一つが「私自身」の過去との対話である。過去の出来事を教訓として、そこから何を学ぶのか。そして将来どのように生かしていくのか。特に近現代史においては重要な視点である。ここで考えることが2点ある。

1：新聞をはじめとするマスコミはどのような考え方で報道すべきなのか。

→「公正な立場で報道すべきだ」

「何が正しいのかの基準をしっかりとつ」

2：私たちは、新聞等マスコミが発信する情報をどう受け止めたらよいのか。

→「報道が正しいとは限らない」

「本当か？と批判的にとらえる」

### 3 新聞活用の効果と課題

近代以降の歴史の授業において、写真や実物資料とともに、当時の政府・軍部の考え方や世の中の雰囲気(空気)を今に伝える資料として、新聞をもっと活用してもよいのではないか。民衆がどのような情報に接していたのかを実感することは、歴史を学ぶうえで大変意義深い。しかし、同時に課題も見えてくる。  
課題1：どの場面で新聞を活用するのか。

→二・二六事件等の転換期のできごとだけでなく、民衆の生活が実感できる記事も活用したい。

課題2：新聞をどこから入手するのか。

→大学や都道府県の図書館には、各紙保存されているので、入手は可能である。

新聞等が発信する情報をそのときの雰囲気(空気)に身をまかせ、一方的に受け取るのではなく、主体的に考え行動できる生徒を育てるためにも、歴史的分野において、より多くの授業実践を積み重ねていくことが求められている。